

池袋を知るために

渡辺憲司

池袋学は地方史ですか。

そんな質問を受けたことがある。以前地方史学会などにも関係したことがあるが、私には、どうも地方史という言葉は馴染まない。地方という言葉は、文書などでよく使う、地方（じかた）という云い方から生じたものであるが、中央という言葉に対して生まれたものであることも確かである。中央に対する何か抵抗のような意識があると同時に、中央を優位なものとして位置づけているような意識があるようだ。少し狭い意識が働いているような気がしてならない。

郷土史という云い方も、地方史という云い方の前にはよく使われた。一九五〇年代以降、新たな教育体制が整い始めた時には、郷土史にかわって、地方史という云い方を新鮮に思えた時期もあった。

郷土史のもつ、郷土愛に対する思い入れの偏愛的な意識から脱却することが、求められていたのだろう。史料の選択、厳密性、お国自慢的発想への批判であったと云ってもいい。日本史そのものが（歴史観そのものが）問われた時代でもあった。

その後は、郷土史・地方史でもなく、地域史という云い方が固定化してきた。かなり一般的に、地域史という云い方が通用していると云ってもいいのではないか。偏愛的でもなく、対中央意識でもなく、各地が自立的に歴史の対象をとらえようとしたものである。

一九七〇年代後半であったと思う。沖縄学を提唱した玉野井芳郎先生が、地域史という概念を熱く語っていたのを記憶している。玉野井先生は、経済学を専門とされていたが、エコロジー・反近代主義に関する論評を展開されていた。イヴァン・イリイチの紹介者としてもよく知られていた。

地域学 (regionology) は、人文科学 (殊に、考古学、歴史学、文学、言語学、文化人類学、民族学) ・社会科学 (環境学・地政学・地理学) 及び自然科学 (生態学・地学・地質学) と云った学際的視座を有するもので、加えて強調されていたのはフィールドワークによる主体的視座である。それらが総合的に地域を対象とする学問である。

池袋学は、地域学である。

そう云えば、これですむような気もする。極めて包括的な物言いでも便利である。しかし、私にとっては、こんな学問領域論など、妙に白々しいような気がしてならないのも確かである。

池袋は、極めて懐ろの深い町である。ここで生まれ育ち、故郷と感じる人も、池袋学を支えてくれた人も多くいる。しかし、おそらく池袋学を支える大多数は、そうではない。

私にとっても、池袋は、十八歳からの町である。この地で悩み、この地で学び、この地を浮浪し、ある時は、この町を離れ、そして、又戻って来る。

池袋で過ごした時間の長さが我々の共有物ではない。池袋を通過点だという人もいる。交通の要衝として、乗換駅だという人もいる。池袋を支える人の多くがそうであるならば、それはそれで互いに支え合う共有物なのではないか。

知らない者同士が、何かを知ろうとして集まる。池袋で邂逅する。「学」とは知ることが原点である。

二〇一五年夏、池袋学は、戦後七十年の節目にあつて、この町が、今まで七十年間抱えていた〈過去〉に思いをはせた。ある者は、戦災を語り継ぎ、ある者は、カストリ雑誌を手にし、ある者は、ホッピーを片手にカラオケで歌った。そして、通りすがりの人で公園は満ち溢れた。

振り子のように池袋学の概念規定はこれからも揺れるに違いない。しかし、何処にでもある都会の光景の中に、何処にでもあるような大切なものを見出し、息を吐きたいと思う。それは、故郷と呼んではいけないような心情であり、地方史と呼んではいけない庶民的批判精神であり、総括的な懐ろの深さを示す地域学でもある。

忘れてならないのは、池袋の地を愛し続けることだ。もとよりそれは戦後七十年この地で守り育てた平和への祈念でもある。

(わたなべけんじ 立教大学名誉教授、自由学園最高学部長、「池袋学」座長)